

成田市三里塚御料牧場遺跡

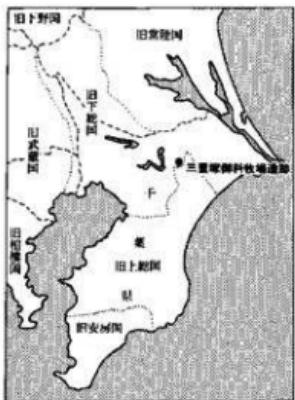
— A 隊舎移転予定地内埋蔵文化財調査報告書 —

平成7年3月

新東京国際空港公団
財団法人 千葉県文化財センター

なり た し さん り づか ご りょう ばく じょう い せき
成田市三里塚御料牧場遺跡

— A隊舎移転予定地内埋蔵文化財調査報告書 —



平成 7 年 3 月

新東京国際空港公団
財団法人 千葉県文化財センター



馬土手断面（9トレンチ）

序 文

千葉県の北部に位置する広大な下総台地には軍馬を育成した古代以来の牧が存在し、江戸時代には幕府によって佐倉七牧の一つ取香牧とっこうまきが經營されました。また、明治時代には三里塚地区に政府直営の御料牧場ごりょうまくじょうが開かれ、日本の近代的畜産業の発祥の地となったことが知られています。現在もこの地域の随所に見られる馬土手は、野馬の畠への侵入を防いだり、捕獲するための施設として造られたものです。

昭和44年に御料牧場は新東京国際空港に伴い閉場し、空港は昭和53年に開港しました。今回、新東京国際空港公団は空港関連施設の整備に伴い空港警備隊の宿舎の移転を計画し、千葉県教育委員会と予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いを協議しました。その結果、発掘調査による記録保存の措置を講じることで協議が整い、発掘調査は千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施し、中近世の野馬除けや牧の段階から近代牧場に至る盛土造成の変遷を確認するなどの成果が得られました。

このたび、調査結果をまとめて報告書として刊行することになりました。本報告書が学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深めるために、多くの方々に活用していただければ幸いです。

終わりに、発掘調査から報告書刊行に至るまで、御指導、御協力いただいた千葉県教育委員会、新東京国際空港公団、成田市教育委員会に厚くお礼を申し上げるとともに、発掘調査及び整理作業に従事された調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成7年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 奥 山 浩

凡　　例

1. 本書は千葉県成田市三里塚御料牧場1-724ほかに所在する三里塚御料牧場遺跡（遺跡コード211-057）6,900m²の発掘調査報告書である。
2. 調査は新東京国際空港公団が施工する空港警備隊のA隊舎移転に先立ち、千葉県教育委員会の指導のもとに財團法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長西山太郎、成田調査事務所長矢戸三男の指導のもと、以下の期間に主任技師井上哲朗が実施した。
発掘調査 平成6年5月23日～6月22日
整理作業 平成6年6月24日～6月30日
4. 本書の執筆、編集は井上が行った。
5. 本書で使用した地形図、遺構平面図の方位はすべて座標北である。
6. 航空写真は京葉測量株式会社による1967年撮影のものを使用した。
7. 馬土手に設定したトレンチの平面図・断面図の縮尺は1/80とした。
8. 馬土手の土層は説明文のほか、下記のようにスクリーントーンで表示した。



9. 遺物実測図の縮尺は1/3とした。
10. 現地調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関から御指導・御協力をいただいた（敬称略）。深く謝意を表します。

新東京国際空港公団、成田市教育委員会、成田市三里塚御料牧場記念館

本文目次

序 文	
凡 例	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 地理・歴史的環境	1
第3章 馬土手の現況	6
第4章 調査の方法と経過	9
第5章 トレンチ調査	10
第6章 結 語	22
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 江戸時代の佐倉牧の分布	1	第10図 6トレンチ	14
第2図 現在の遺跡周辺地形図	2	第11図 7トレンチ	15
第3図 明治初期の遺跡周辺地形図	4	第12図 8トレンチ	16
第4図 下総御料牧場建物配置図	5	第13図 9トレンチ	17
第5図 三里塚御料牧場遺跡馬土手測量図	7	第14図 10トレンチ	18
第6図 発掘調査風景	10	第15図 11トレンチ	19
第7図 1・2・3トレンチ	11	第16図 出土遺物	20
第8図 4トレンチ	12	第17図 馬土手土層剥離作業	21
第9図 5トレンチ	13		

図版目次

巻首図版 馬土手断面（9トレンチ）	
図版1 航空写真 空港建設以前の遺跡周辺	
図版2 調査前1 (1) 遠景（南西から） (2) 北端部（北から） (3) 中央部（北東から）	
図版3 調査前2 (1) 中央部（南西から） (2) 中央部（南から） (3) 南部（北から）	
図版4 1・2・3トレンチ (1) 1トレンチ（西から） (2) 2トレンチ（西から） (3) 3トレンチ（南東から）	
図版5 4トレンチ (1) 全景（南東から） (2) 西側溝 (3) 東側溝・道	
図版6 5トレンチ (1) 全景（南東から） (2) 西側溝・倒木痕 (3) 東側溝・道	
図版7 6トレンチ (1) 全景（南西から） (2) 西側溝 (3) 東側溝・道	
図版8 7トレンチ (1) 全景（南東から） (2) 西側溝 (3) 東側溝・道	
図版9 8トレンチ (1) 全景（南西から） (2) 西側溝 (3) 東側溝・道	
図版10 9トレンチ (1) 全景（南西から） (2) 西側溝 (3) 東側溝・道	
図版11 10トレンチ (1) 全景（南西から） (2) 西側溝 (3) 東側溝・道	
図版12 11トレンチ (1) 全景（南西から） (2) 西側溝 (3) 東側溝・道	
図版13 (1) 灰釉窓利脚部～底部 (2) 灰釉窓利脚部破片 (3) ガラス瓶	

第1章 調査に至る経緯

平成5年度、新東京国際空港公司と千葉県教育委員会は空港警備隊のA隊舎移転に当たり、建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、三里塚御料牧場遺跡の馬土手1条(460m)部分の6,900m²について、発掘調査による記録保存の措置を講じることとなった。平成6年5月から6月まで、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を行い、同時期に地形測量図を業者委託して作成した。

第2章 地理・歴史的環境(第1~4図)

三里塚御料牧場遺跡の馬土手は、千葉県北東部の成田市三里塚御料牧場1-724ほかに所在し、新東京国際空港南側の標高41m前後の下総台地上に位置する。下総台地の中でも千葉県北西部の東葛飾地域や、成田地域を含む佐原市から東金市域にかけては広大な台地が形成されている。特に三里塚地域は、本遺跡のすぐ南西が太平洋に南下する木戸川の、南西約2kmの地点が印旛沼に北上する根木名川の、北東5kmの地点が太平洋に南下する高谷川の水源地域であり、各水系の分水界となっている。





第2図 現在の遺跡周辺地形図
(国土地理院1/50000成田使用)

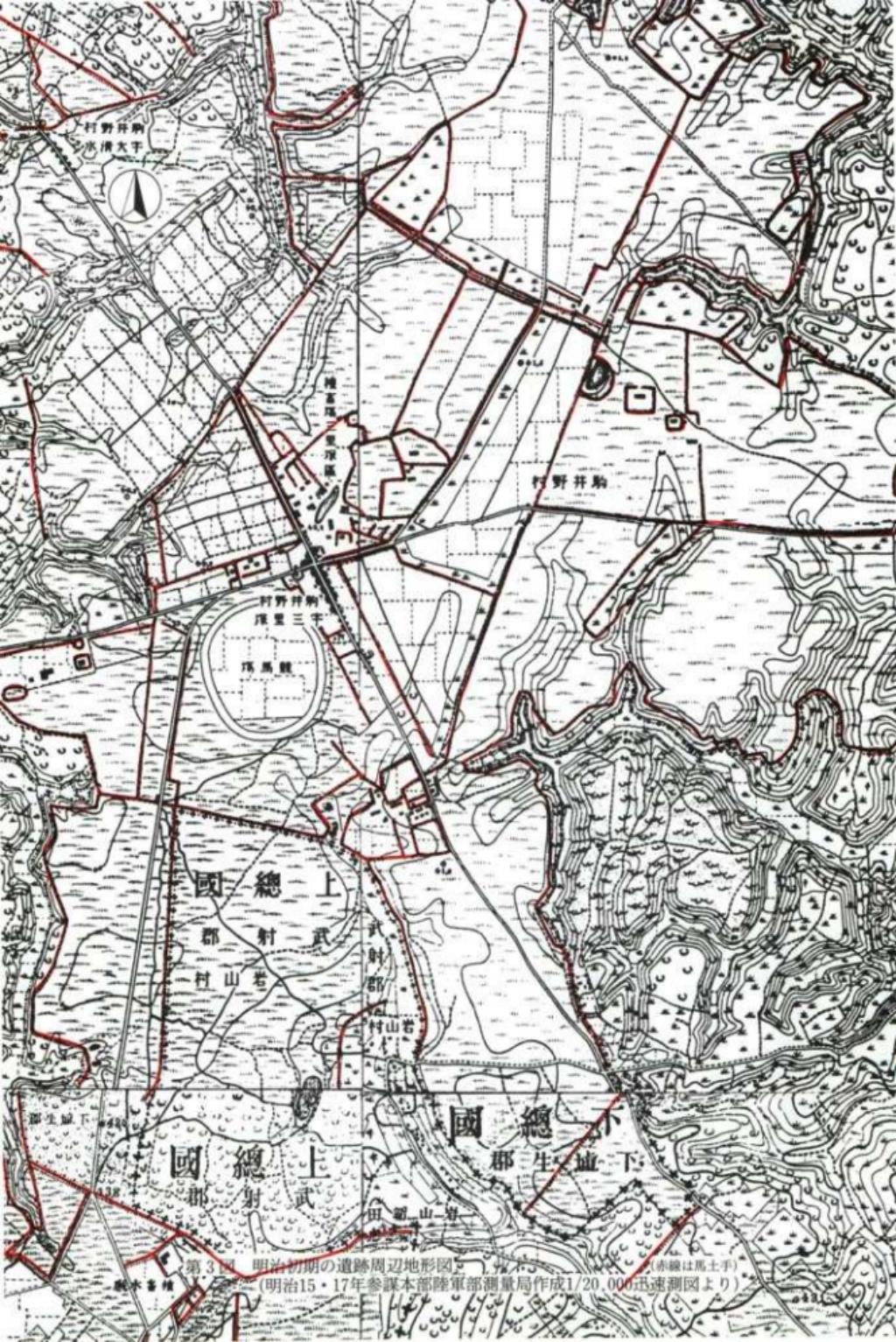
当地域の広大な台地上には狩獵・採集經濟を主とした旧石器時代から縄文時代早期の遺跡が多く発見されているが、河川に浸食された谷津を主な生産基盤とした弥生時代以降の集落は少ない。逆に古代から山林や荒野を利用した牧や製鉄などの生産遺跡の存在が顕著である。牧は、近代以降の牧場のように馬を飼育するのとは違い、野山を柵や野馬土手で囲んでおいて、必要に応じてその中の野生馬を捕獲していた。また、馬が畑地に入らないための野馬除けの土手を造成した。成田周辺にもこのような野馬土手が随所に残存している（第3図）。そして、三里塚御料牧場遺跡の馬土手は、まさにその名の通り明治以来の牧場の施設であって、江戸時代の取香牧を受け継いだものと考えられるが、野馬土手ではなく飼育された馬を対象とした土手とその性格を変えた。よってここでは、当地域の牧から牧場への歴史を概観することにする。

古代においては、10世紀初頭に編纂された「延喜式」には「下總五牧」が見え、軍馬や農耕馬を捕獲していたと推測される。続く中世は武士の時代となって馬の必要性は古代より増したと考えられるが牧の史料は少ない。しかし、永祿年間（1558～1570）ころの海上・石毛氏宛て千葉胤富判物に、北条氏政が数日中に下總に赴き中山（市川市）辺りへ着陣することになっているので野馬の手配をするように申し付けている。⁽¹⁾このことから、戦国時代には千葉氏が下總牧を經營していたことがうかがわれ、その後を後北条氏が継いだことが推測される。

本格的な牧の整備は江戸時代に入ってからで、幕府は東葛地域に「小金牧」、香取・成田・山武地域に「佐倉牧」、安房地域に「嶺岡牧」を開場している。佐倉牧は内野牛（富里町七栄、新木戸付近）、高野牧（富里町高野、新井田新田付近）、柳沢牧（八街市街地付近）、取香牧（成田市取香、三里塚、芝山町岩山付近）、小間子牧（八街市四木開墾付近）、矢作牧（多古町十余三、久賀付近）、油田牧（栗源町岩部、上野台付近）の七牧からなっており、江戸時代末には3,500頭余りの馬が放牧されていた。

牧は領地の代官に預けられ、直接經營は牧士が行った。牧士は野馬の生育状況の監視や牧内の野馬除（野馬土手）・捕込・水呑場などの管理のほか、例年夏から秋にかけて野馬捕りという行事を行った。野馬捕りは牧士の下に置かれた網掛、勢子罠、捕手が働く。まず、近郷の村々から動員された勢子が糞と弁当を背負い長い竹竿を持って2・3日野馬を追い歩く。野馬の群れを騎馬の牧士が追い回し土手を利用して高さ3～4mの土手で囲まれた捕込の入口付近まで集める。そして牧士の馬が捕込の木戸の中へ入り野馬が続いて捕込の中に入ったところを木戸を閉める。捕込内では徒歩の網掛、捕手が先に網の輪を付けた竹竿を持ち、輪を馬の首にかけ、それを合団に手下の者たちが駆け寄って野馬を転倒させる。その後、脚を縛り、口に繩を付け、当歳馬（その年に生まれた馬）は焼き印をして野に返し、一部を將軍への献上用として、三歳馬の手ごろなものは馬喰（馬を売買、周旋する人）や近在の百姓へ払い下げられた。当遺跡周辺では北方約2kmに取香捕込が、南方約1.5kmに五十石込が存在した。⁽²⁾

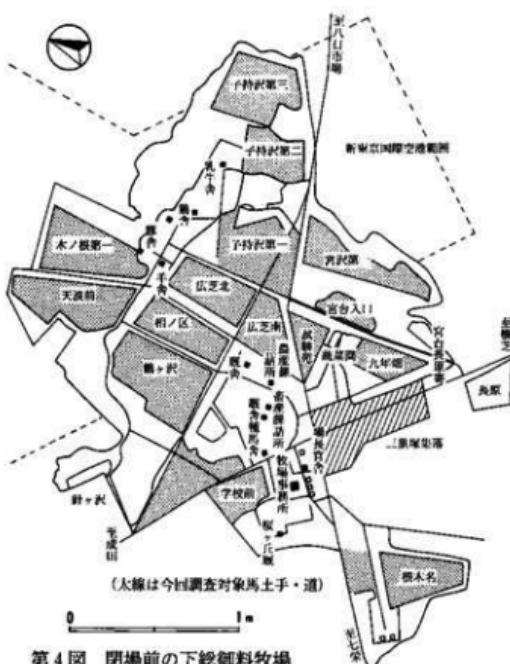
佐倉牧では、当初は戦国時代に牧士を努めた青柳四郎右衛門、明谷四郎左衛門、宮野兵庫の



第3図 明治初期の遺跡周辺地形図
(赤線は馬土手)
(明治15・17年参謀本部陸軍部測量局作成1/20,000迅速測図より)

3名が前代から引き続いて牧士に任命されている。その後慶長19年（1614）に6名に増員され、野馬奉行として綿貫氏が任命されている。牧士は寛永年間（1624～1644）にはさらに4名増え、10名となる。慶長年間の増員は大坂冬の陣・夏の陣などが契機となったとも考えられている。なお、佐倉七牧には牧経営に動員された野付村と呼ばれた村が210か村存在した。野付村は勢子人足の差し出しのほか、野馬土手や捕込の修復、野火防止、植林、伐採、野犬被害の防止などの多くの負担が課せられた。しかも、野馬による田畠の被害も多かった。

江戸幕府の佐倉七牧は明治維新によって新政府が直轄し、明治6年（1873）には毛織物業の発展のため、アメリカから牧羊技師D. W. アップジョーンズを招いて牧羊業が推進された。牧羊場に選定された取香牧は、江戸時代以来の牧士たちの要請もあって、羊・牛・馬の種畜場（品種改良の場）用地となった。こうして、明治8年（1875）には下総牧羊場・取香種畜場が開場し、官舎・牧夫舎・畜舎の建設、馬土手の造成、柵の設置、道路敷設、植林、畑の開墾などが行われた。その後、明治13年（1880）には両者が合併して下総種畜場となった。ここでは全国から生徒を募集し、牧羊法、牛馬豚管理法、西欧農具用法、獣医学などの講義・実習が行われた。牧羊場では海外から輸入した綿羊を繁殖させ、明治9年から10年間に11,343頭を生産した。また、種畜場では馬・牛の改良・普及が行われ、馬は同じく10年間に678頭が生産された。その後、明治19年（1886）御料局高堀出張所、明治21年（1888）宮内省下総御料牧場、大正11年（1922）宮内省下総牧場、昭和17年（1942）下総御料牧場、昭和31年（1956）宮内庁下総御料牧場と所属や名称を変えた。馬の繁殖は大正11年（1922）から中止していたが、昭和2年（1927）から再開し、競争馬としてサラブレッドを産するようになった。しかし、昭和41年（1966）、この地に新東京国際空港設置が決まり、昭和44年（1969）に閉場を迎えたのである。



第4図 閉場前の下総御料牧場
(宮内庁『下総御料牧場史』より)

なお、調査対象の馬土手及びこれに沿った道路は、明治15年～17年（1882～1884）測量の陸軍測量局作成迅速測図（第3図）によると、西側は土手に沿った松林を挟んで畠地、東側は牧草地であったことがわかる。また、廃場前の御料牧場の図（第4図）によると、東から伸びる南北2本の小谷の先端を結ぶように東北～南西方向に約2kmにわたってほぼ直線的に伸びたものの一部で、場内を南北に走り大きく仕切る重要な施設であったことがうかがわれる。今回の調査対象部分はその南半に該当する。北半部分は空港敷地内や国道296号線などにより既に消滅している。南方は、やや西に折れて墓地の南辺を通り、県道成田松尾線まで部分的に消滅しながら連続する。この馬土手はさらに県道の反対側の麻薬探知犬訓練センターの北側土手に連続するようである。ここは南北辺200m、東辺300m、西辺180mの台形状に2m前後の土手がめぐっており、かつては内部も土手によって区画されていた。この部分には明治10年（1877）、官舎や病畜舎が新築され、周囲の土手はこの時に築いたものと考えられる。ここでは主に御料牧場内の衛生に関する業務とともに、重症の家畜を病畜舎に入れ治療に当たった。また、明治13年（1880）以降は、駒場農学校（現東京大学農学部）の獣医科の学生の実地治療の研究や家畜の飼養管理、農作業の実習地となり、第二次世界大戦前まで続けられた。昭和61年（1986）、麻薬探知犬訓練センター建設に先立ち発掘調査が実施されているが、内部を仕切る土手は1m～1.5mと低いもので、両側に溝を伴う土手は1条のみで、浅い掘込みであった。^③

（注）

（1） 年次七月十七日付 海上藏人・石毛大和入道宛 千葉胤富判物 （原文書）

「千葉県史料中世編 县外文書」

（2） 「三里塚」 勧千葉県北総公社 1971年

（3） 「御料牧場遺跡－麻薬探知犬訓練所予定地内埋蔵文化財調査－」 勧千葉県文化財センター 1988年

（参考文献等）

・「下総御料牧場史」 宮内庁 1974年

・「成田市史」 近世編 史料集1 1982年

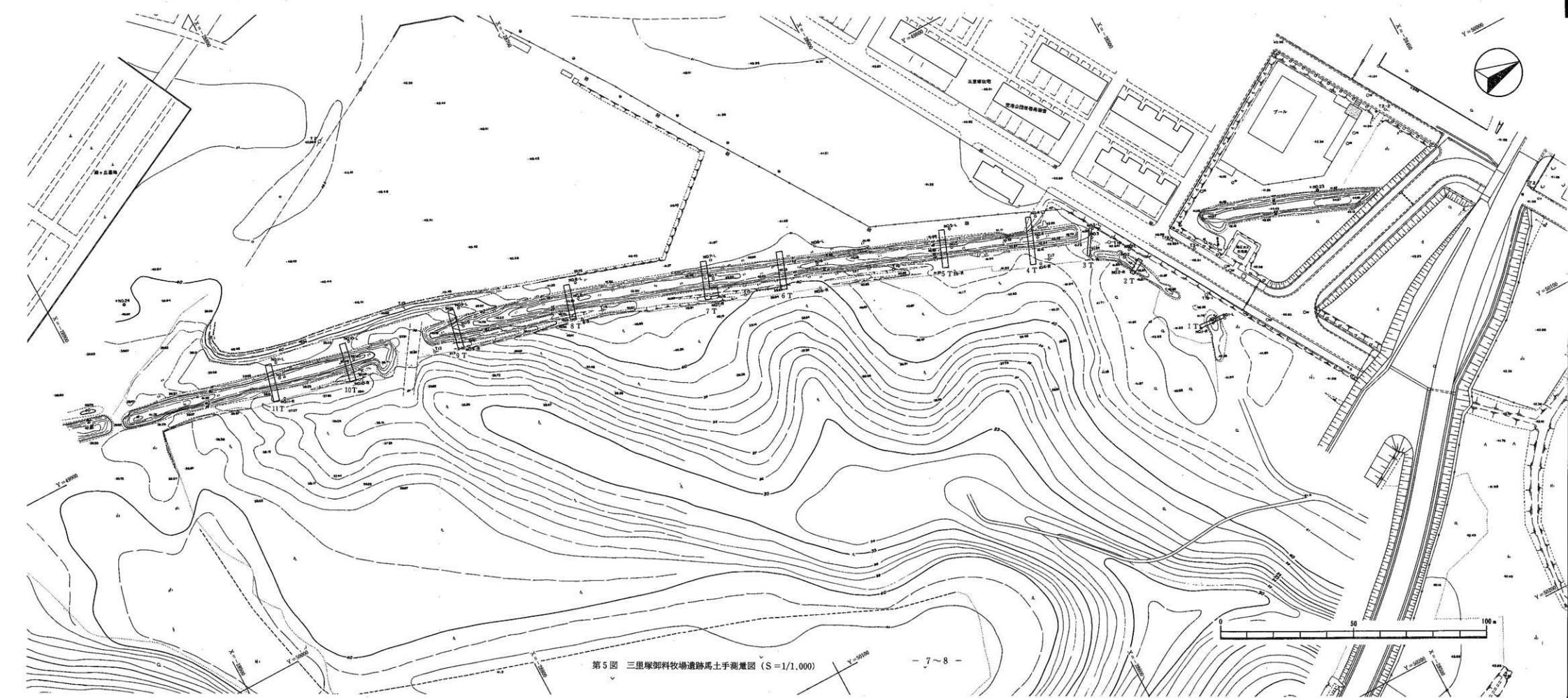
・「成田市史」 中世・近世編 成田市史編さん委員会 1986年

・「成田市史」 近現代編 成田市史編さん委員会 1986年

この他、成田市三里塚御料牧場記念館の展示も参考とさせていただいた。

第3章 馬土手の現況（第5図）

調査対象の馬土手は、高さ2m前後で長さ約380mのほぼ南北方向に直線的に延びるものと、三里塚住宅付近で北東方向に分かれる長さ約60m、高さ0.5m～1.5mの低い部分である。馬土手は空港公園三里塚住宅内を北東～南西方向に通る舗装道路によって分断されるが、この道路部分の馬土手が本来連続していたのか、あるいは切っていたのかは迅速測図などでは不明であった。しかし、道路の東側の低い土手が道路造成時にこの馬土手を削平した残土であるという



推測が最も妥当であると考えられた。

この道路から南の馬土手は北から200mほどまでの主軸はN-22°-Eであるが、そこからわずかに東寄りに曲がり主軸はN-13°-Eほどになる。頂部には幅2mほどの平場を有し、高さ2.5m前後、基底幅7m前後を測る。頂部の標高は北から約100mほどまでが標高43.5mほどであるが、北から120m前後の部分で標高42.7mと低くなる。しかし、この部分は東側が谷の影響で比高が約3mと最も高くなり、西側の比高は1.7mと最も差が無い部分である。続いて、北から約200m以南は標高43.3mの高さから徐々に下がり、道路端から約250mの位置にある切れ目手前で標高40.4mとなる。この切れ目については北側が崖面となっていること、南側の北端部が東側に膨らんでいることから、当初は連続していたものが切られて残土を南側に置いたものと推測された。それ以南の頂部は標高40.5mほどの高さが70mほど続くが、その先は再び標高42mと若干高くなる。以上のような馬土手の高さの変化は馬土手構築の地盤である地形に左右されたようで、東側の谷が馬土手部分までかかる部分は低くなったものと考えられる。

また、調査区南端部には幅約2mの切れ目があり、両側に小道が存在するが、地元の方の話では古くから切れていたということである。切れ目の斜面に太い木が生えていることからも、当初からの切れ目であったことが推測される。その先はやや西に折れて県道を隔てて麻薬探知犬訓練センターの土手に連続するように伸びている。

なお、馬土手の東側に沿って現在は使用されていない道が存在する。北から60m～100mの部分と110m～170mの部分はややくぼみ、北から180m～240m部分はくぼみが顕著で馬土手側に段が伴うことから掘削された土が盛られたものと考えられた。

また、馬土手の頂部には5m～10m間隔で直径50cm前後の桜の大木が、東側特に谷が食い込む部分には直径30cm前後の落葉高木が5mほどの間隔で植えられている。植樹は防風、風致、日陰用として松、杉、櫻、桜などが明治9年～18年（1876～1885）に多く実施されたもので、桜は御料牧場が廃場となった近年まで名所として眼に入った面影を伝えている。今回の測量図には植樹されたものと推測される木の位置も示した。

第4章 調査の方法と経過

発掘調査着手の前に測量図を業者に委託して、指導しながら図面を作成した。同時に、馬土手に直交するようにトレンチの設定を行った。トレンチは北部の低い高まりに2本、本来の馬土手の先の平坦部に1本、以南の馬土手には下幅約2m、長さ15m前後の規模で8本設定した。8本のトレンチはまず重機による掘削を行い、両側溝の底から馬土手頂部まで3m以上あるため、壁崩落などの安全対策として断面を2段とした。また、9トレンチでは今後の資料として、土層の剥離を行った。

第5章 トレンチ調査（第6～17図）

1 トレンチ 今回の調査区北端部に当たる、空港公團三里塚住宅内を通る道路脇の低い盛土2か所のうちの北側の高さ1m・長さ約20mの部分に設定した幅1m余・長さ8mのトレンチである。盛土はしまり弱く、南側の表土直下には新期テフラ層が存在し、北側は削られてロームブロックを多く含む層が、その上にはプラスチック製トタンや現代の碎石を含む層が存在した。したがって、この盛土は舗装道路の造成時に北側が削平されて、さらに土を盛られたものであることが確認された。

2 トレンチ 舗装道路に沿った高さ0.5m～1.5mの盛土のほぼ中央部に設定した幅1.5m・長さ約6mのトレンチである。表土直下にはロームブロックを多く含む暗褐色土が1mほど載るが、東側はしまりが弱く、植林された杉の根元が埋まっている。この部分も近年盛られたものであり、西側から重機で盛られ、東側は植林のために押されなかったためにしまりが弱くなつたことが推測される。

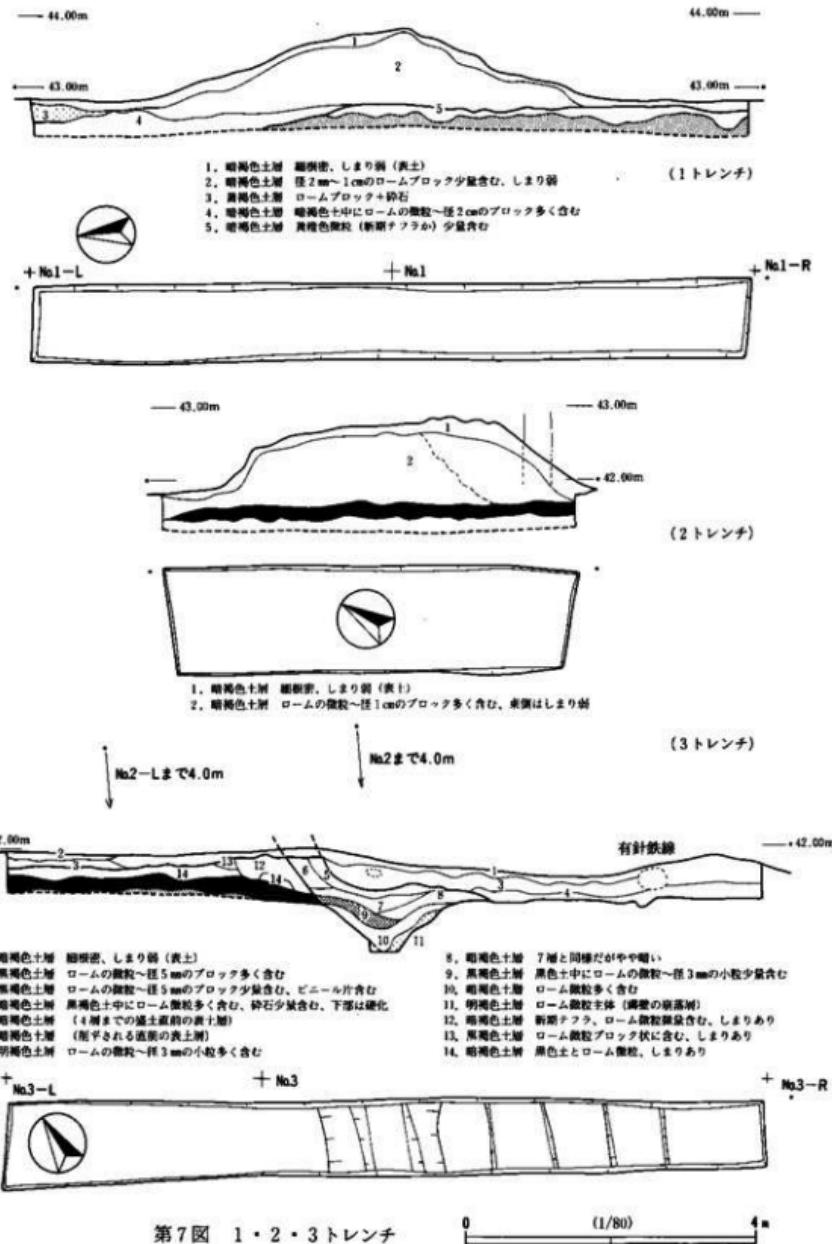
3 トレンチ 2トレンチを設定した盛土と馬土手北端部の間の平坦部に設定した幅1m・長さ11mのトレンチである。ほぼ中央部に上幅1.5m、深さ約0.7m、底幅約0.5mの溝がほぼ南北方向に検出された。この溝は4～11トレンチで検出された馬土手の東側溝の延長線上にある。また、溝の東側では固く踏みしめられた硬化面が存在し、特に、圧力により若干低くなった幅70cm前後の部分が2条検出された。これは荷車や馬車の轍と推測される。土層については、1、2層が現代の盛り土、5層から11層は馬土手から溝に流れ込んだ土、12層から14層は馬土手の基部であろう。これによって、この平坦部や舗装道路部分には馬土手が存在して西側のそれに連続することが確認された。なお、盛土中から縄文早期撫糸文系土器細片が1点出土した。

4 トレンチ 幅約2m・長さ17.5mのトレンチである。馬土手の西側裾には0.6m～1mの厚さでしまりの弱い暗褐色土が積まれている。これは道路建設によって切られた馬土手の構成土であったと考えられる。東側裾から頂部までの比高は2.3mである。馬土手構築前の旧表土と考えられる黒色土層は草や根などの上に土が積まれた影響か上面が多孔質であり、その下に新期テ



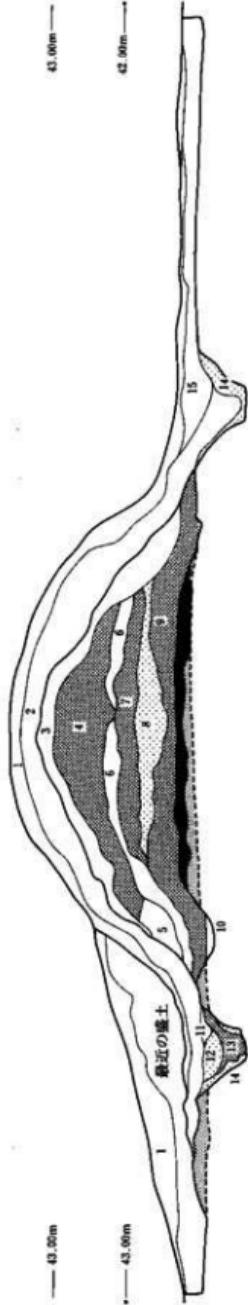
第6図 発掘調査風景

フラ層・ソフトローム層が堆積している。旧表土上面は幅約4.5m残り、その両側は約30cmの段差があつて溝の肩に達する。両溝間は7.3m。この段の下は浅い溝状をなし、特に西側は顕著であり、馬土手構築の目安とした設計線的な溝の可能性がある。盛土は9層を両側の段上にも載せ、中央のくぼみに7、8層が載る。こうした構築方法は馬土手の盛土の崩壊の防止対策と考



第7図 1・2・3トレンチ

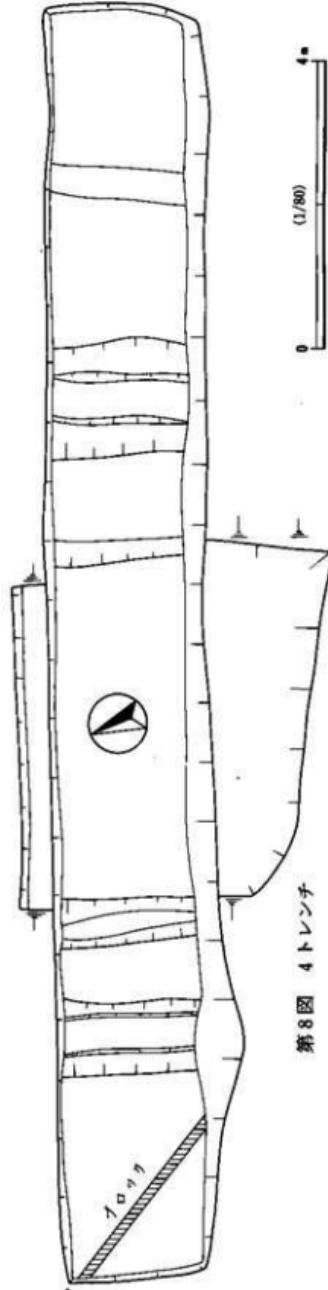
0 (1/80)



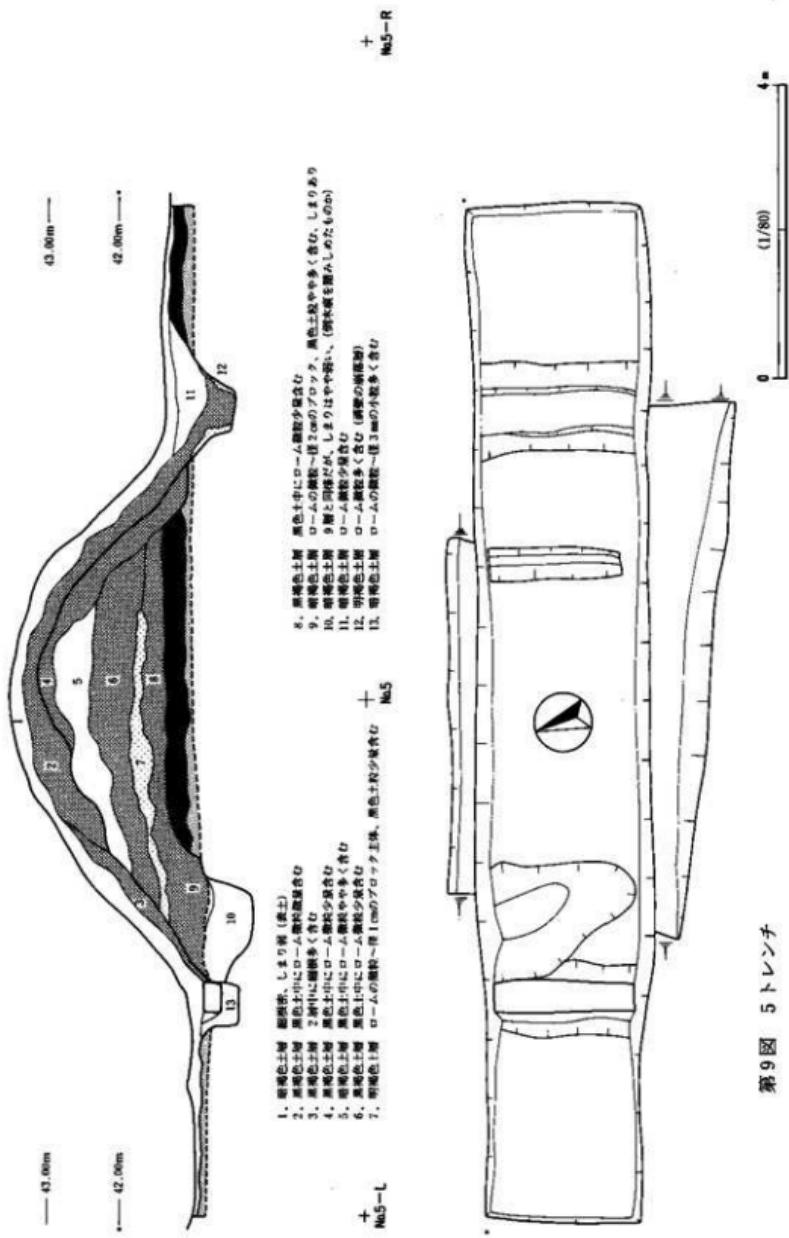
1. 黄褐色土層
細粒砂、しまり弱
2. 黄褐色土層
しまり強
3. 黄褐色土層
ローム量少
4. 黄褐色土層
ローム量中
5. 黄褐色土層
黄色土中にローム量少
6. 黄褐色土層
ローム量中
7. 黄褐色土層
ローム量少
8. 黄褐色土層
ローム量少
9. 黄褐色土層
ローム量中
10. 黄褐色土層
ローム量少
11. 黄褐色土層
ローム量少
12. 黄褐色土層
ローム量少
13. 黄褐色土層
ローム量少
14. 黄褐色土層
ローム量少
15. 黄褐色土層
ローム量少

+ No4-L
+ No4-R

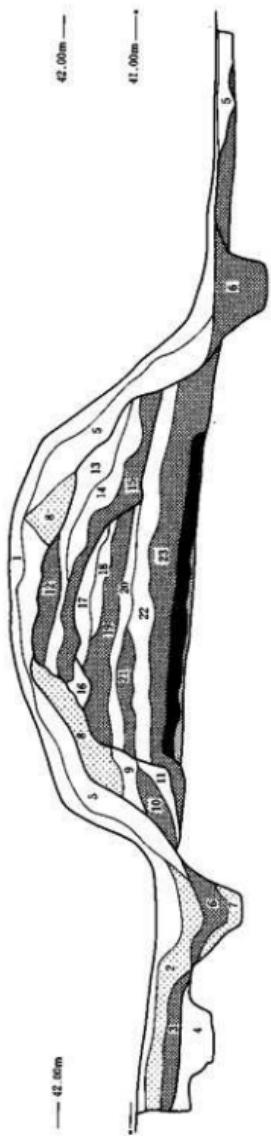
- 12 -



第8図 4トレンド

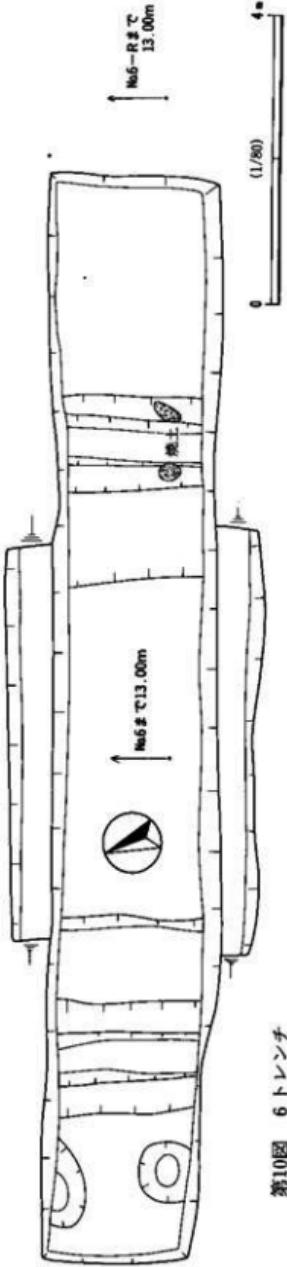


第9図 5 トレンチ

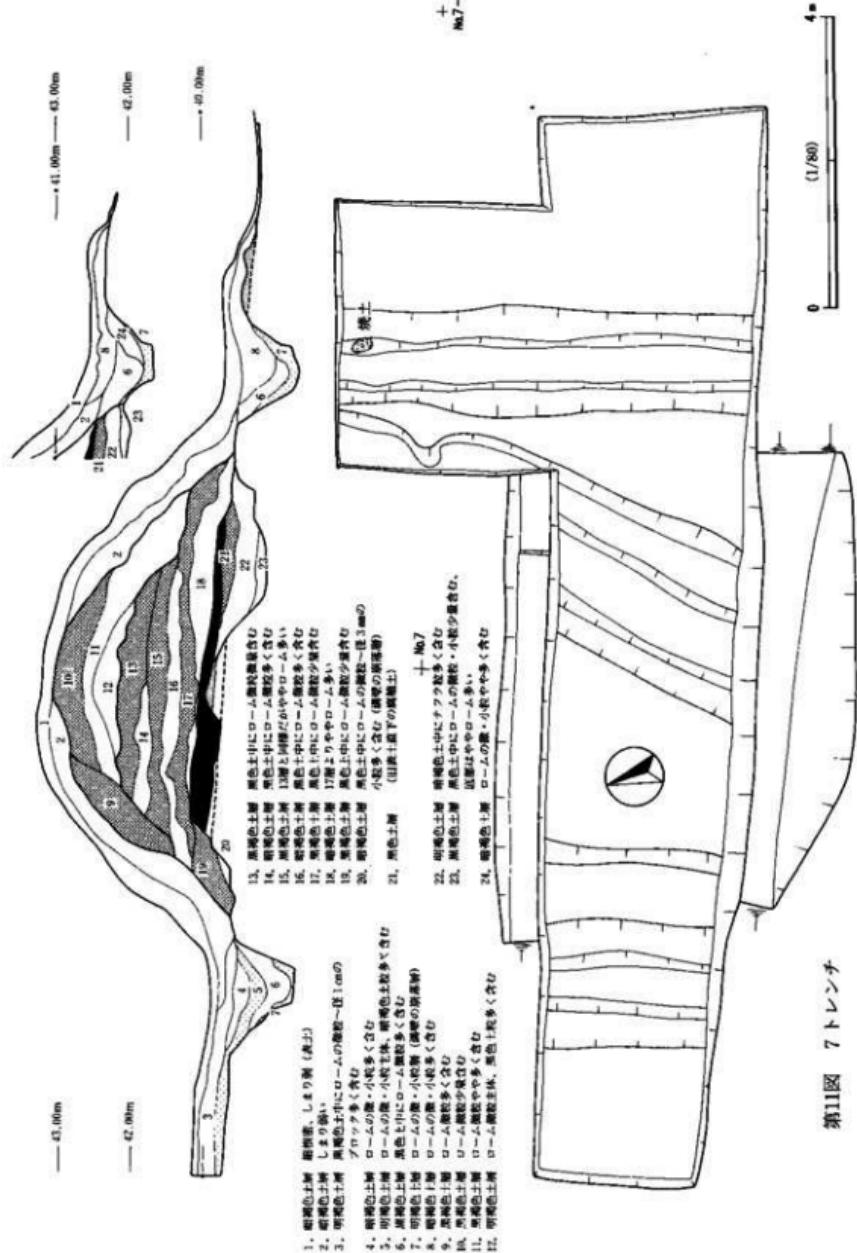


13. 黒褐色土層 黑色土中にロームの隙間に少含む
 14. 黑褐色土層 黑色土中にロームの隙間に1cmのブロック少含む
 15. 黑褐色土層 黑色土中にロームの隙間に少含む
 16. 淡褐色土層 ロームの隙間に2cmのロックと黑色土
17. 黑褐色土層 黑色土中にロームの隙間に1-2cmのロックと黑色土
18. 黑褐色土層 黑色土中にロームの隙間に多く含む
19. 黑褐色土層 黑色土中にロームの隙間に少含む
20. 黑褐色土層 黑色土中にロームの隙間に1cmのブロックや多く含む
21. 黑褐色土層 黑色土中にロームの隙間に少含む
22. 黑褐色土層 黑色土中にロームの隙間に少含む

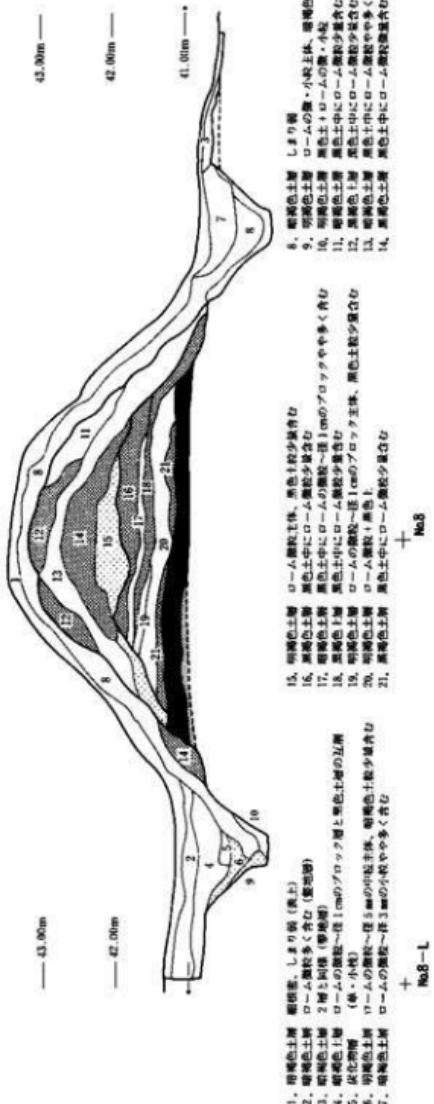
23. 黑褐色土層 黑色土中にロームの隙間に少含む



第10図 6 トレチ



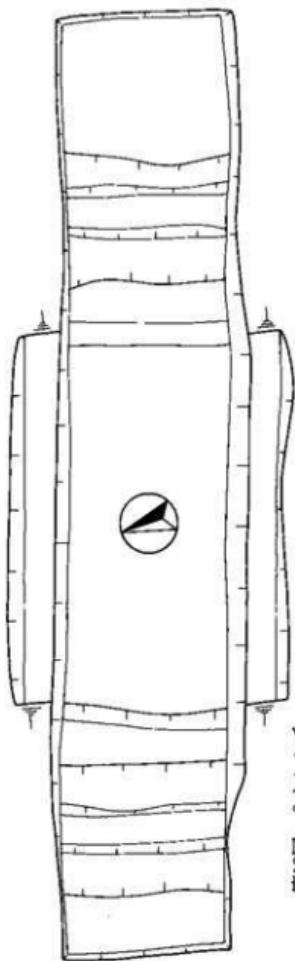
第11図 7トレンチ



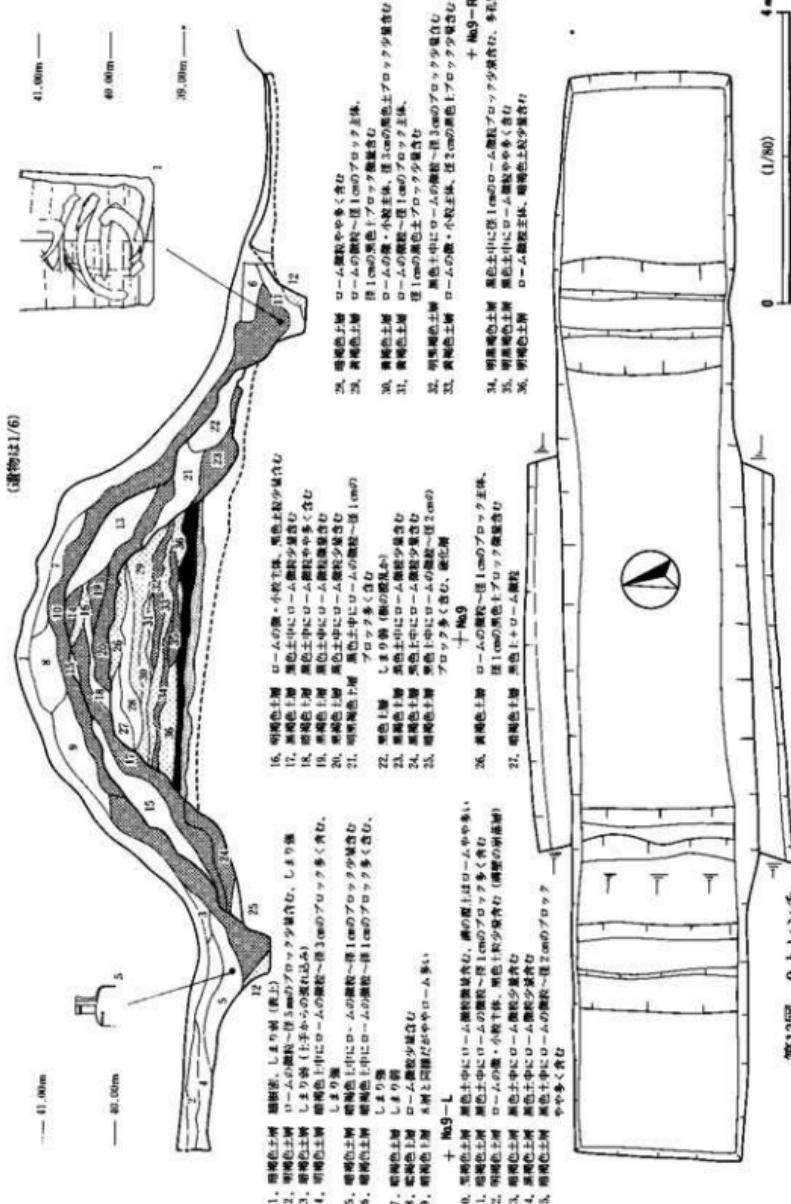
No.8-R

No.8

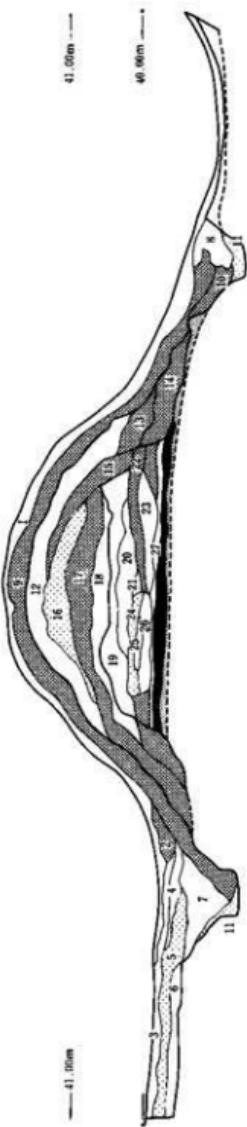
No.8-L



第12図 8トレンチ



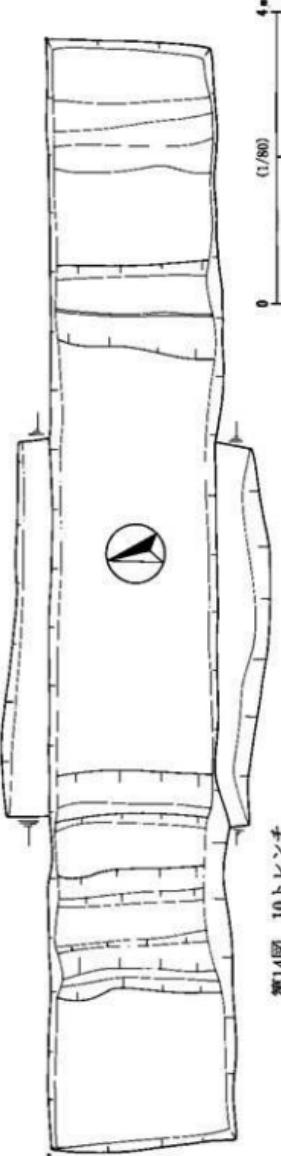
第13図 9トレンチ



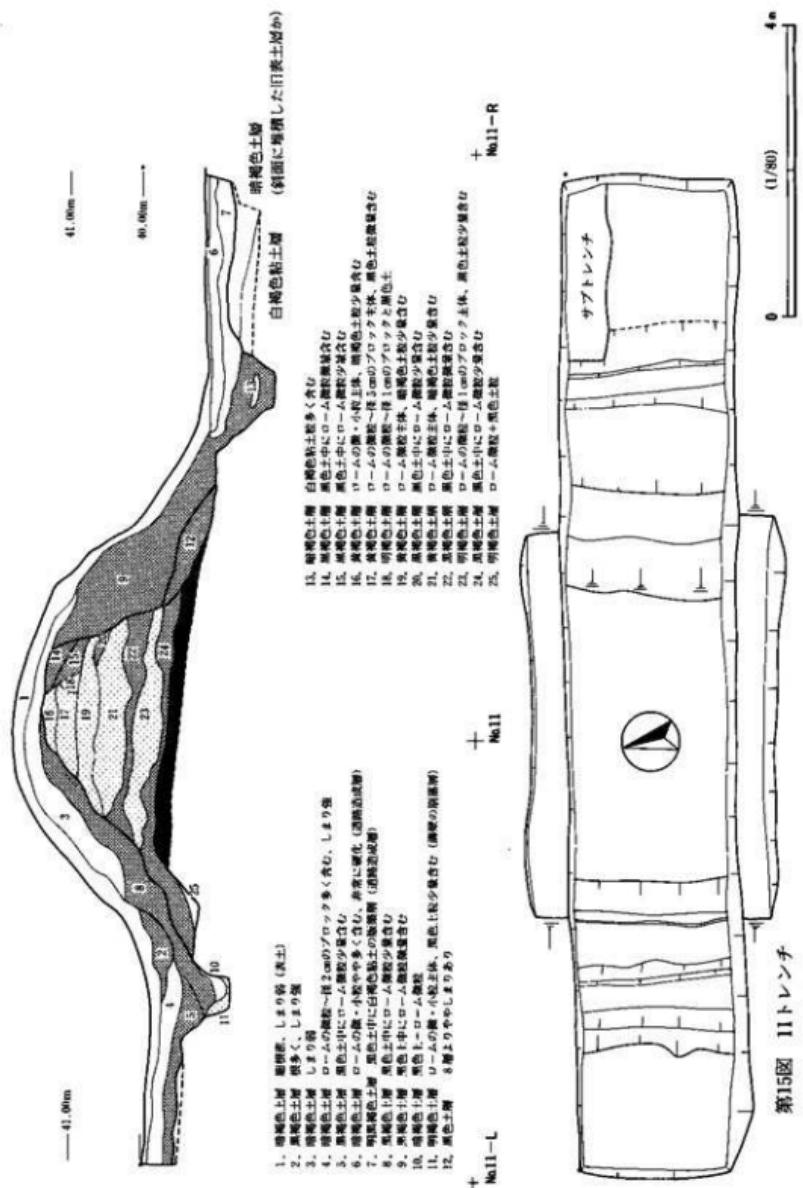
1. 明褐色土質 繊維状、しまり無し (硬土)
 2. 黒褐色土質 黒色土中にロームの微少量含む
 3. 明褐色土質 黒色土中にロームの量多く含む
 4. 明褐色土質 ロームの量や少く含む 少少含む
 5. 明褐色土質 ロームの量多く含む
 6. 明褐色土質 ロームの量多く含む
 7. 明褐色土質 ロームと同様に含む
 8. 明褐色土質 ロームの量多く含む
 9. 明褐色土質 ロームの量多く含む
 10. 黒褐色土質 黒色土中にロームの量、少少多く含む
 11. 明褐色土質 黒色土中にロームの量多く含む
 (表面の崩落層)
 12. 明褐色土質 黒色土中にロームの量少量含む
 13. 明褐色土質 黒色土中にロームの量多く含む
 14. 明褐色土質 13番と同様に含む
 15. 黒褐色土質 ロームの量多く含む
 16. 明褐色土質 ロームの量多く含む
 17. 明褐色土質 ロームの量多く含む
 18. 明褐色土質 ロームの量多く含む
 19. 黒褐色土質 ロームの量多く含む
 20. 明褐色土質 黒色土中にロームの量多く含む
 21. 明褐色土質 黒色土中にロームの量多く含む
 22. 黒褐色土質 ロームの量多く含む
 23. 明褐色土質 黒色土中にロームの量少量含む
 24. 明褐色土質 ロームの量多く含む
 25. 明褐色土質 黒色土中にロームの量少量含む
 26. 明褐色土質 やや多量 (黑色土中含むもの)
 27. 明褐色土質 黒色土中にロームの量多く含む
 28. 明褐色土質 黒色土中にロームの量多く含む

+ No.10-L

+ No.10-R



第14図 10トレンチ



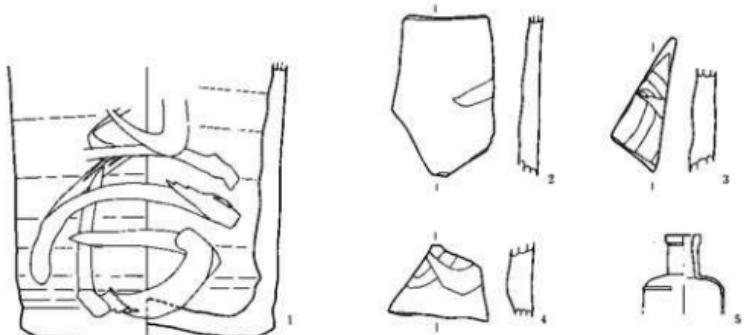
第15図 11トレンチ

えられる。7層から9層が80cmほど積まれた後は、4層から6層が中央から西側にかけて80cmほど積まれている。その上の2層はしまりの弱い暗褐色土層で、溝を含めて一定期間に自然に崩落や堆積したものと考えられる。

5 トレンチ 幅2.0m、長さ13.8mのトレンチである。旧表土上面は幅約4m残り、頂部までは2.2mである。旧表土の両側にはやはり段があるが、西側の段の下には深さ約60cm、最大幅1.7mの不整形な落込みが検出された。覆土は上面が硬化しているが、下はやや弱く倒木痕を埋めてから叩きしめたものと考えられる。両溝間は7.2mを測る。旧表土から1.5mまでは主に西側を中心に土が盛られ（6、7、8層）、4層は頂部から東側にかけて張り付けるように盛られている。最後に2、3層が溝を含めて堆積している。

6 トレンチ 幅2.0m、長さ14.8mのトレンチである。東側は谷が迫り地表からの比高が約2.7mと高いが、西側は約2mと差がある。旧表土は東側に若干傾斜して上面幅で約4.5m残り、頂部までの高さは2.2m、両溝間の幅は7.0mである。旧表土から約70cmは水平に積まれ（20層～23層）、中心部にはきらに17層から19層が60cmほど積まれている。次に中央から東側に12層から16層が50cmほど積まれた後、8層から11層が主に西側斜面を張り付ける様に盛られている。最後に30cmほどの5層が載る。東側溝の外側には約40cmの盛土がある。西側溝の覆土は他のトレンチと異なり黒褐色土が堆積し、溝の両壁中腹に焼土が検出された。焼土は人為的に捨てられたものと考えられる。なお、盛土中から土師器細片が1点出土した。

7 トレンチ 幅2.5m前後、長さ14.5mのトレンチを設定したが、馬土手の下の旧表土下から溝状遺構が検出されたので東側を拡張した。上幅約2m、下幅約70cm、旧表土下からの深さ約60cmで、壁中段に稜を有するもので、北東～南西方向を走る。底には硬化面は検出されなかったが、北東方向には東側の谷が入り組んでおり、溝というよりも馬土手構築以前の谷と台地とをつなぐ道であった可能性が高い。7トレンチ部分も6トレンチ同様、旧表土は東側にやや傾斜



第16図 出土遺物 (S=1/3)



して上面幅約4.5m残り、頂部までは高さ2.1m、両溝間は幅7.0mである。盛土はまず両端の段も含めて20cm~50cmの厚さで水平になるように積み（16~18層）、次に中心部に1.2mほど盛り上げ（12~15層）、さらに中心から東側にかけて80cmほど盛った（10、11層）後、西側斜面に若干張り付け（9層）、両側斜面に10cmほど盛土されている。その後、東側では道路造成に伴って掘削した土を溝に入れて、最終的には2層によって全体が覆われている。このことから、馬土手の東側の廐道は馬土手が両側に溝を有して機能した時期よりも後に造られたものであることが確認された。なお、盛土中から土師器又はカワラケの細片が1点出土した。

8 トレンチ 幅2.4m前後、長さ12.9mのトレンチである。旧表土上面は幅5mほど残り、頂部までは高さ2.2m、両溝間は幅6.6mである。6、7トレンチ部分の谷とは異なる谷が北東から上がってきていている部分のため、旧表土は東側へ若干傾斜する。盛土は旧表土から70cmほど水平になるように積み（15~21層）、その上に厚さ80cmほど盛り上げ（14、15層）、さらに両端の段上も含めて全体に50cmほど載せている（11~13層）。東側の溝は7トレンチ同様に埋められ、その上に段、外側に道が造られている。なお、盛土中から鉄滓が1点出土した。

9 トレンチ 幅2.4m前後、長さ17.8mのトレンチである。この部分では小谷が北東から入り込んでおり旧表土は東側に傾斜している。旧表土上面は幅4m、頂部までは高さ2.2m、両溝間は幅7.7mである。土の盛り方は旧表土の上にロームを主体とした土で90cmほど積み（26~36層）、次に両端の段も含めて溝の両肩から40~70cm積まれ（13~25層）て溝と共に機能し、その上に20cmほど黒褐色土がかぶって溝も埋まっている。その後頂部と両裾に土が盛られており、東側溝上の土は道路掘削の堆土と見られる。東側溝の10層中から出土した德利（第16図1~4）は胸部から底部にかけての破片で底径13.0cm。外面の墨書文字は不明だが、その上に灰白色（7.5Y7/1）の、内面はやや黄味を帯びた灰白色（7.5Y8/2）の灰釉がかかる。底部がくぼみ、胸部が直線的な形態から19世紀前半所産の瀬戸美濃産陶器とみられる。西側溝の外側は盛土層（2、4、5層）であり、5層中から目盛りとしての凸帯を有する透明ガラス瓶（第16図5）が出土した。19世紀末~20世紀初頭の薬瓶と推測される。なお、当トレンチ部分については、あらためて断面を切り、今後の資料として土層の剥離を実施した（第17図）。



(1) 樹脂吹き付け、ガーゼ貼り付け



(2) ガーゼの上から裏打ち剤塗付



(3) ガーゼ及び土の剥離

第17図 馬土手土層剥離作業

10 トレンチ 幅2.3m前後、長さ約18mのトレンチである。旧表土上面は幅4.2mほど、頂部までは高さ2.1m、両溝間は幅7.1mである。土の盛り方は旧表土から約60cmはほぼ水平に積み(18~27層)、その上に中央から西側の段にかけて90cmほど盛り上げ(16~18層)、次に中央から東側の段上に貼り付けられ(12~14層)、最後に9層が溝も覆う。西側溝の外側平坦部はその後で40cmほど積まれている。なお、西側造成土中から近世鉄釘小片が1点出土した。

11 トレンチ 幅2.4m前後、長さ約13.6mのトレンチである。北東から入り込む谷の先端部に位置するため、旧表土は東側に傾斜している。旧表土上面は幅3.6mほど残り、頂部までは高さ2.1m、両溝間は幅7.0mである。西側は旧表土から60cmほどの段差を造りだすことによって土の流失を防いだものと考えられる。土の盛り方は旧表土の上にロームを主体として約1.7m盛り上げて(16~23層)から、東側の段上に盛られ(12層)ている。8、9層は崩落及び堆積したものと考えられる。最終的には両側溝の外側に40cmほどの土盛りが行われている。特に東側の道路は粘土が混入したためか、非常に硬化している。

(参考文献) 江戸遺跡研究会第3回大会資料『江戸の陶磁器』 1990年

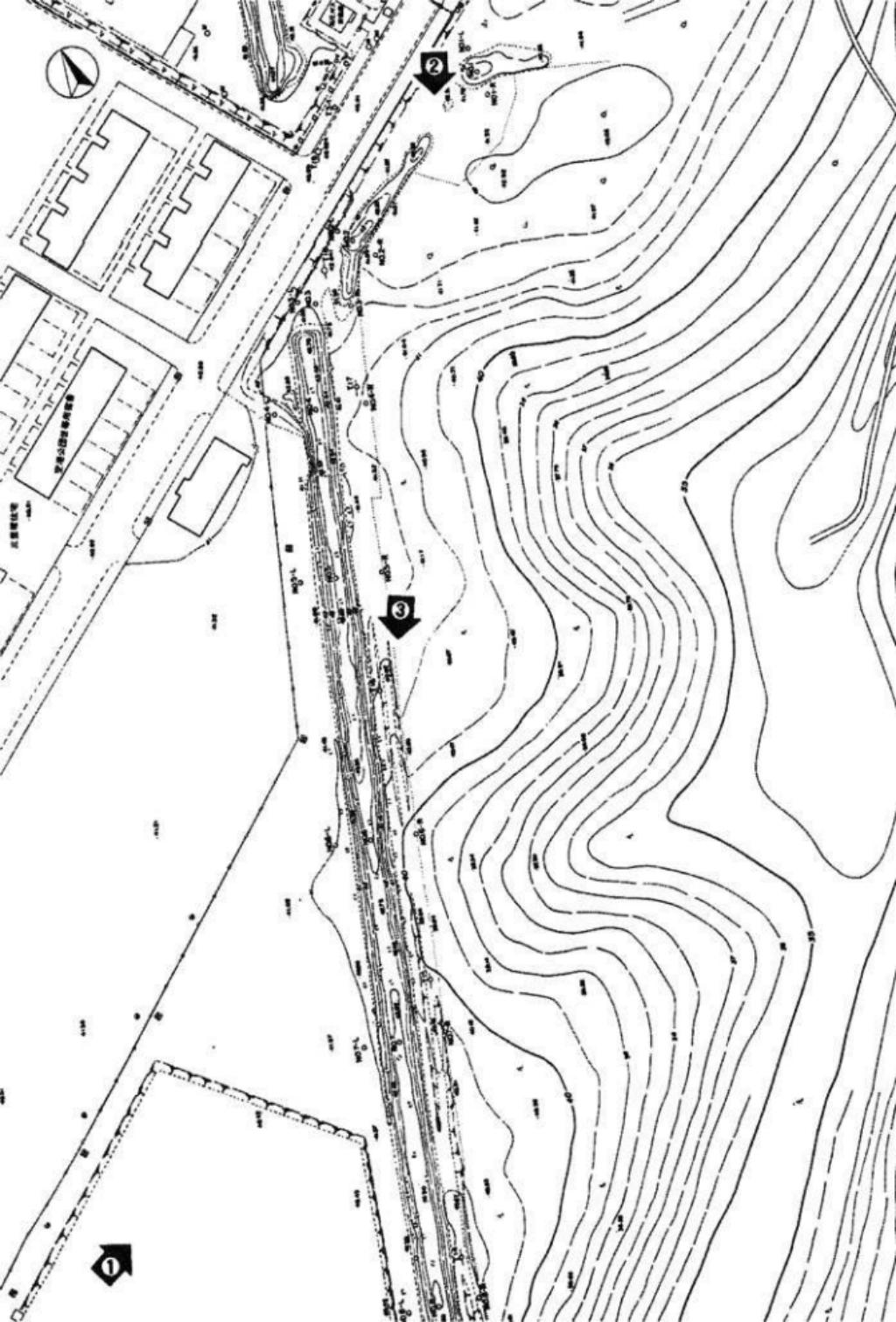
第6章 結語

今回の馬土手の測量及び発掘調査から判断され、考察される事項は次のとおりである。

- (1) 北端部の高さ1m~2mの盛土は舗装道路によって破壊された馬土手の残土である。
- (2) 馬土手の基本的工法及び段階 ①表土を幅2m~3m残して両側を段整形する。 ②周辺の表土、両側の溝を掘削し、60cm~90cmの厚さで水平方向に積む。 ③その上に1m前後盛り上げる。 ④斜面に貼り付けて整形する。この結果、周辺から2.0mほどの高さになる。 ⑤20cm~30cmの厚さで溝を含めて全体にしまりの弱い土が載る。 ⑥馬土手の西側で土盛り整地、東側で道路造成が行われ、土手上や裾部で植樹される。
- (3) 各段階の性格 ①~④段階は一連の馬土手の工法で、両側に溝を伴うものであり、特に東側の小谷を意識して牛馬の逃亡、野犬の侵入などを防いだ本来の馬土手の役割であろう。⑤段階は馬土手構成土が崩落及び表土が自然堆積したものと推測される。⑥段階は近代牧場においてこの馬土手の西側で畑、東側で道路造成、さらに土手上や裾部で植樹されたことに伴って行われた普請であったと考えられる。
- (4) 時期 場内開墾が明治8年(1875)の取香種畜場開場と同時に始まったこと、植樹の盛んな時期が明治9~18年(1876~1885)ころであることから、⑥が近代牧場の造成期であろう。また、⑤は一定期間が推測されること、参考として、⑤の層中から19世紀前半(江戸時代末期)の徳利が、⑥の層中から19世紀末から20世紀初頭(明治時代~昭和初期)のガラス瓶が出土していることも含めると、①~⑤が近代牧場より前の野馬土手で、あるいは中世の牧まで遡る可能性もある近世の取香牧の施設と考えられる。

写 真 図 版

空港建設以前の道路網（縮尺 1/10,000）
(路線内に当時の下総御陵牧場範囲)





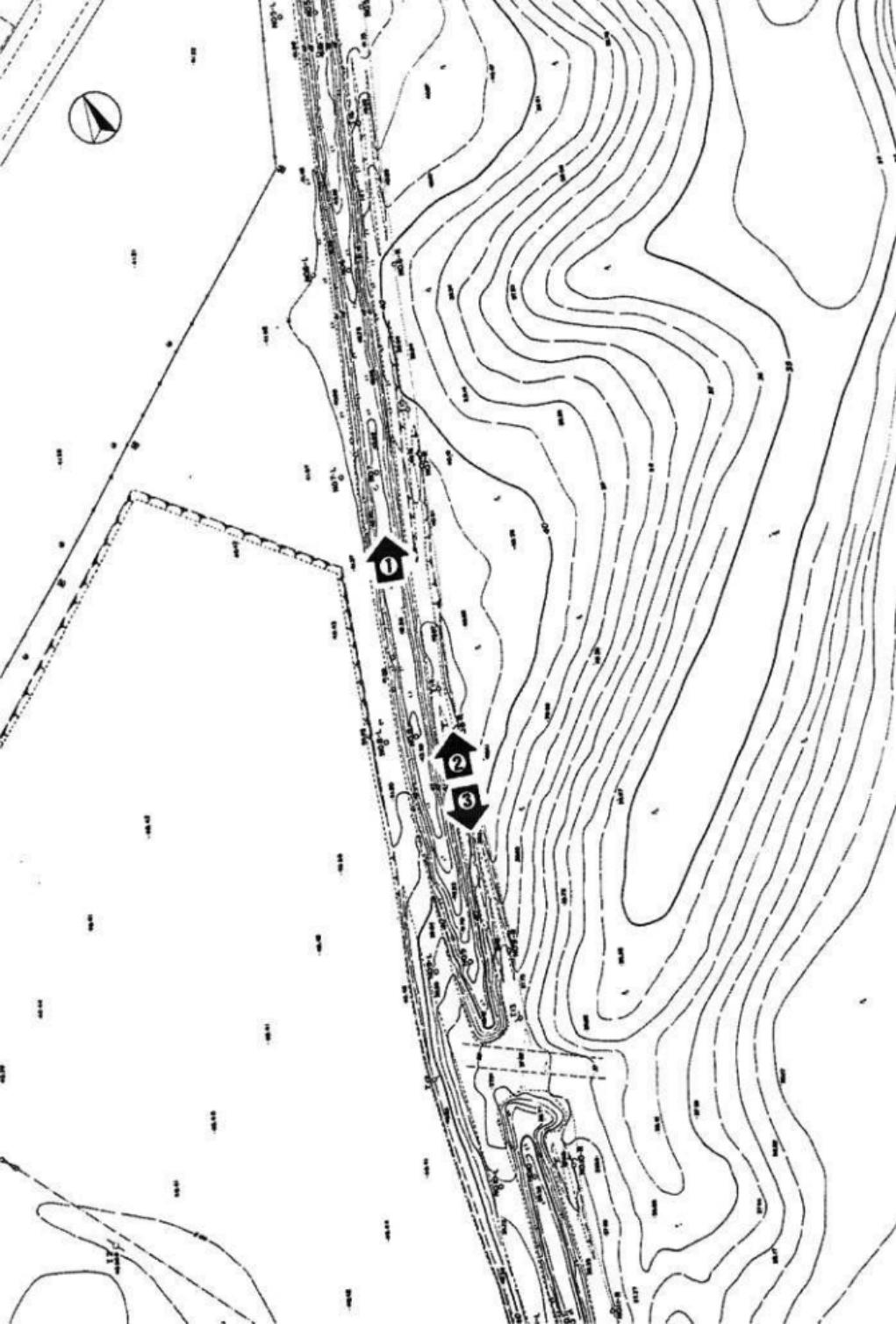
(1)遠景（南西から）



(2)北端部（北から）



(3)中央部（北東から）





(1)中央部(南西から)



(2)中央部(南から)



(3)南部(北から)



(1) 1 トレンチ (西から)



(2) 2 トレンチ (西から)



(3) 3 トレンチ (南東から)



(1)全景 (南東から)



(2)西側溝



(3)東側溝・道



(1)全景 (南東から)



(2)西側溝・倒木痕



(3)東側溝・道



(1)全景(南西から)



(2)西側溝



(3)東側溝・道



(1)全景(南東から)



(2)西側溝



(3)東側拡張区溝



(1)全景（南西から）



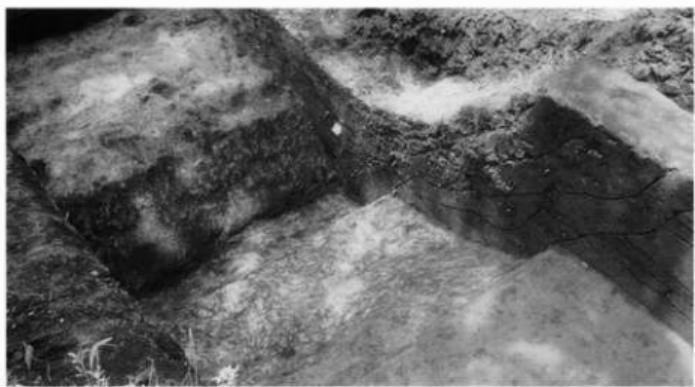
(2)西側溝



(3)東側溝・道



(1)全景 (南西から)



(2)西侧溝



(3)東側溝・道



(1)全景（南西から）



(2)西侧溝



(3)東側溝・道



(1)全景(南西から)



(2)西側溝



(3)東側溝・道



(1)灰釉德利胴部～底部



(2)灰釉德利胴部破片



(3)ガラス瓶

報告書抄録

ふりがな	なりたしさんりづかごりょうばくじょういせき						
書名	成田市三里塚御料牧場遺跡						
副書名	A隊舎移転予定地内埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第262集						
編著者名	井上哲朗						
編集機関	財団法人千葉県文化財センター						
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL 043-422-8811						
発行年月日	西暦 1995年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号	北緯 - - -	東緯 - - -	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
三里塚 御料牧場	千葉県成田市 三里塚御料牧場	12211 057	35度 44分 20秒	140度 23分 20秒	19940523～ 19940622	6,900	建物建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
三里塚 御料牧場	馬土手	縄文 奈良・平安 中世 近世 近代	馬土手・溝 馬土手・溝 馬土手	繩文土器 土師器・鉄滓 カワラケ 陶器・鉄釘 陶器・ガラス瓶	縄文土器は早期燃糸文系。 馬土手は中・近世の野馬除け、近世の 取香牧の段階から近代以降の下總御料 牧場の時期に盛土されて使用されたもの と推測される。		

千葉県文化財センター調査報告 第262集
成田市三里塚御料牧場遺跡
—— A隊舎移転予定地内埋蔵文化財調査報告書 ——

平成7年3月24日 印刷

平成7年3月31日 発行

発 行 新東京国際空港公団
東京都中央区日本橋本町2丁目7番1号

編 集 財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2
電話：043(422)8811(代表)

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市中央区都町2丁目5番5号
